

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：12601

研究種目：新学術領域研究(研究領域提案型)

研究期間：2012～2016

課題番号：24119006

研究課題名(和文)当事者研究による発達障害原理の内部観測理論構築とその治療的意義

研究課題名(英文)Theorizing principles of developmental disorders through internal measurement using tojisha-kenkyu and its therapeutic potential

研究代表者

熊谷 晋一郎(Kumagaya, Shinichiro)

東京大学・先端科学技術研究センター・准教授

研究者番号：00574659

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 127,300,000円

研究成果の概要(和文)：当事者研究には、他の研究と同様、新しい知識を「発見」するための方法という側面と、生きやすさをもたらす「回復」の側面がある。

まず発見については、自閉スペクトラム症のメカニズムに関して当事者研究の中で提案された「情報のまとめあげ困難説」を、他分野の専門家と協力しながら理論的に精緻化した。またその仮説を、発声制御、顔認知、パーソナルスペース、ボディイメージ、聴覚過敏や慢性疼痛などに適用して検証実験を行った。次に回復については、横断調査、追跡調査によって効果検証を行うとともに、当事者研究の方法をプロトコル化し、当事者主導型の臨床研究による介入研究を行った。

研究成果の概要(英文)：Tojisha-kenkyu has two aspects; new method for "discovering" new knowledge like other disciplines, and new intervention that brings "recovery".

As for discovery aspect, we refined the "information gathering difficulty theory" suggested in tojisha-kenkyu on the mechanism of autistic spectrum disorders in cooperation with other fields. We also applied the hypothesis to speech control, face recognition, personal space, body image, hyperacusis and chronic pain and carried out verification experiments.

Regarding recovery aspect, effectiveness of tojisha-kenkyu as an intervention was verified by cross-sectional survey and follow-up survey. Additionally, we developed the protocol of tojisha-kenkyu and conducted user-led clinical research.

研究分野：当事者研究

キーワード：発達障害 自閉スペクトラム症 聴覚過敏 慢性疼痛 当事者主導型臨床研究 自伝的記憶 予測符号化 障害の社会モデル

1. 研究開始当初の背景

近年、自閉症スペクトラム障害 (ASD) をはじめとした発達障害と診断される人の数は急上昇している。他方、同じ診断基準を用いれば ASD 有病率は、1983 年では 0.7%、1999 年では 1% であり、有意な増加は認められないという報告もある (Kadesjö et al., 1999)。すなわち、現在 ASD と呼ばれる特徴を持った人々の数は、それほど大きく増加はしておらず、むしろ診断される人々の急増はかつてはそれほど問題視されてこなかった彼らが、ここ最近急に問題にされ始めるようになったという社会文化的な要因の変動を反映していると推定される。

現在、臨床や研究、制度保障の面で広く利用されている ASD の診断基準は、障害についての社会モデルの考え方 個体側に帰属しうる比較的永続的な特徴である impairment と、多数派の個体的特徴に合わせてデザインされた人為的環境 (制度や道具、規範など) と impairment との間に生じる齟齬である disability の区別 をふまえておらず、本人と周囲の人的環境との「間」に生じるコミュニケーション障害という disability を、本人の impairment であるかのように記述している。ゆえに、社会の問題までもが本人の障害の問題に帰属されやすくなっている (Verhoeff, 2012)。

上記のような問題意識に基づき、2008 年に我々は disability を impairment へとすり替えるような既存の「社会的コミュニケーションの障害」という概念をいったん脇に置き、対人関係の次元で生じる困難以前の、一人でのときのモノの見え方、身体における感じ取りかたなどのレベルを探究する目的で当事者研究という方法を採用し、書籍として発表した (綾屋・熊谷, 2008)。研究の結果、感覚運動情報を、カテゴリーやストーリーにまとめあげることが困難であるという特徴が根本的な impairment なのではないかという「情報のまとめ上げ困難仮説」を提案した。また、それを踏まえて disability の生じないアクセシブルな人的・物的環境の条件を提案した。

さらに我々は、当事者研究を通じて自己理解が深まることによって、単に定型発達者向けの社会に適応するというのとは異なる形で、本人の well-being も向上しうることを報告した。これは成人自閉スペクトラム症者の社会的な予後が不良であること (Seltzer et al. 2004; Levy and Perry 2011) 成人 ASD 者への心理社会的介入の効果について良質な研究はいまだ十分ではないこと (Bishop-Fitzpatrick et al., 2013) 近年精神科領域で、社会適応ではなく社会変革を通じた当事者視点での回復パラダイムである「主観的リカバリー」の観点が目ざされていることから意義のある知見であると考えられた。

2. 研究の目的

- 当事者研究によって導かれた「情報のまとめあげ困難説」の学術的定式化と、同仮説の検証
- 発達障害者における聴覚過敏と慢性疼痛の実態・機序解明と支援法開発
- 当事者研究自体が持つ治療的意義の検証

3. 研究の方法

- 当事者研究によって導かれた「情報のまとめあげ困難仮説」の学術的定式化と、同仮説の検証
 - ・ 医学や心理学分野からの外部観測的な知見とすり合わせ、仮説の学術的定式化。
 - ・ 情報のまとめ上げ困難仮説を検証するために、既存の学術研究者と当事者研究者との共同作業によって、実験デザインの構築、実験環境の当事者視点からのアセスメント、結果の協働的解釈などを行い、共著論文を作成。
- 発達障害者における聴覚過敏と慢性疼痛の実態・機序解明と支援法開発
 - ・ オージオロジーとの共同により、聴覚過敏の実態とメカニズムを解明するための調査・実験を行うとともに支援機器の開発。
 - ・ 疼痛科学の専門家との共同により、慢性疼痛の実態とメカニズムを解明するための調査・実験を行うとともに、VR 技術を用いた治療法の開発。
- 当事者研究自体が持つ治療的意義の検証
 - ・ 当事者の語りの質的分析によって、Patient-centered outcome (PCO: 当事者にとって妥当性の高い効果尺度) の抽出
 - ・ 全国の当事者研究グループを連携する当事者研究ネットワークを立ち上げ、各グループの実態を調査するとともに、当事者研究の効果に関する横断調査を行う。
 - ・ もっとも長く当事者研究を行っている浦河べてるの家の縦断調査によって、当事者研究の効果を検証する。
 - ・ 実践家の協力を得つつ、当事者研究のマニュアルを作成し、PCO をエンドポイントとした臨床介入研究を行うことで、効果検証を行う。

4. 研究成果

- 当事者研究によって導かれた「情報のまとめあげ困難説」の学術的定式化と、同仮説の検証

仮説の学術的定式化に関しては、まず当事者研究者の綾屋が 2013 年に刊行した 2 本の論文 (綾屋, 東大出版会, 2013; 綾屋, 医学書院, 2013) によって、身体内外のアフォーダンスの配置が、2 つの自己感 (身体図式と自伝的記憶) のまとめあげに影響を与える状況が定式化された。熊谷は、2008 年以降刊行され

た綾屋による論考を、他の当事者の手記や先行研究と照らし合わせつつ、2014年に博士論文や書籍(熊谷, 金子書房, 2014)として、情報のまとめ上げ困難説を提案した。翌年には Friston の自由エネルギー原理の下でまとめ上げ困難説を解釈し(熊谷, 岩波書店, 2015)、さらに、エピソード記憶を自伝的記憶にまとめあげる system consolidation の困難と、睡眠障害との関わりについて検討した(熊谷, 診断と治療社, 2015; 綾屋, *トラウマティック・ストレス*, 2015)。2016年にはこれまで精緻化してきた仮説を改めて整理(熊谷, *発達心理学研究*, 2016)し、それを踏まえて、どのような支援法が当事者にとって助けになるかを考察した(綾屋, 東大出版会, 2016)。現在、情報のまとめ上げ困難説」を外部観測的な側面を説明する A01 班・B02 班のモデルと統合し、新しい ASD 理論を提唱する論文を執筆した(Inui, Kumagaya, & Myowa, 2017, *Frontiers in Human Neuroscience*)。また A02 班との協力によって、予測符号化モデルによる情報のまとめ上げ困難説の表現を試み、当事者研究と構成論との間で検証可能なモデルを共有し、実験を行った。

仮説の検証に関しては、綾屋の当事者研究で記述された経験を手がかりとしつつ、2つの自己感(身体図式と自伝的記憶)それぞれのまとめあげについて行った。まず身体図式に関しては、ASD では発声制御がフィードバックに強く依存していること(Lin et al., 2015, *Frontiers in Human Neuroscience*)、他者の顔を視覚的にスキャンするパタンのランダムネスが高いこと(Kato et al., 2015, *Journal of Eye Movement Research*)、パーソナルスペースが狭いこと(Asada, 2016, *PLoS ONE*)などの知見を論文発表し、ASD では外受容感覚と内受容感覚、感覚運動の統合(まとめあげ)に困難があることが示唆された。次に自伝的記憶に関しては、ASD の自分語りにおいて、self-event relation (自己と出来事の関連付け)が低く、自己存在感の低さが示唆されることが分かった(上出, 2015, 日本心理学会; Kamide et al., 2015, *The 16th Annual Convention of Society for Personality and Social Psychology*)。また ASD では、行為者の意図性判断と、行為の善悪判断との間の関連性が低い傾向があり(Iijima et al., K., *Neuroscience 2016*)、エピソードの物語的解釈における非典型性的一端が示唆された。

□ 発達障害者における聴覚過敏と慢性疼痛の実態・機序解明と支援法開発

聴覚過敏に関しては、我々は一般大学生を対象に、カルファの聴覚過敏尺度日本語版(6件法)を作成し、「選択的聴取の困難」「騒音への過敏と回避」「情動との交互作用」の3因子構造を持つこと、また、「聴力異常の既往」「抑うつ症状」「性別」「顔面神経麻痺」は聴覚過敏と関連せず、「不安症状」「睡眠障害」「頭

頸部手術の既往」の3つが有意に聴覚過敏と関連していることが明らかとなった(熊谷ほか, 2013, *Audiology Japan*)。また、聴覚過敏が PTSD スコア、自閉スペクトラム症スコア、ADHD スコア、日中覚醒困難、左耳の最小不快閾値(LDLs)と関連し、聴覚過敏スコアの下位スコアである選択的聴取困難が両耳間時間差(ITD)の感度の高さと関連しており(熊谷, 2014,) *教育オーディオロジー研究*、脳幹オリブ核における傷害の関与が示唆された。さらに支援法開発としては、A01 班との協働により、自閉スペクトラム症における聴覚過敏特性に基づいた個人適応型過敏性緩和システムを提案した(市川樹ほか, FIT2016 第15回情報技術フォーラム)。

慢性疼痛に関しては、当事者研究や(綾屋, 2015, *トラウマティック・ストレス*)、先行研究のレビュー(熊谷, 2014, *Practice of Pain Management*)に基づき、ASD では内臓感覚を含んだ身体図式や、自伝的記憶のまとめ上げ困難を痛みとして経験する可能性があることを述べた。実験的には、ASD では触覚閾値は正常だが、触覚刺激に対する交感神経反応が亢進しており、内臓感覚-自律神経系の関与が示唆された(Fukuyama et al., 2017, *Scientific Reports*)。加えて A01 班との共同で、神経障害性疼痛患者の患肢の脳内運動表象を定量化する手法を開発し、運動表象(身体性)の破綻による痛みの発症機序を解明するとともに(Osumi et al., 2015, *Neuroscience Letters*)、仮想現実(VR)を用いた神経リハビリテーション治療を行い、その治療機序が身体性の再獲得(知覚-運動協応の再統合)であることを解明した(Osumi et al., 2017, *European Journal of Pain*)。また、体性感覚刺激を同期入力することによって治療効果が高まることを明らかにした(Sano et al., 2016, *Journal of NeuroEngineering and Rehabilitation*)。さらに慢性疼痛では身体図式のまとめ上げ困難だけでなく、空間認知にも異変が生じており、視空間表象と内的空間表象の認知が鏡像として表象されていることを明らかにした(Sumitani et al., 2014, *Brain and Cognition*)。

以上を踏まえつつ、ASD における感覚過敏・鈍麻に関する総説を発表した(熊谷, 2015, *発達障害研究*)。

□ 当事者研究自体が持つ治療的意義の検証
Patient-centered outcome (PCO: 当事者にとって妥当性の高い効果尺度)の抽出としては、2005年から2013年までに寄せられた当事者研究 225 事例のそれぞれについて、「考察」のセクションから当事者研究のメリットに焦点を当てて分析した研究(山根ほか, 2014, *日本精神障害者リハビリテーション学会第22回いわて大会*)や、精神障害や発達障害の当事者7名を対象に行ったグループインタビューの分析(Sato et al., 2014, *Joint World Conference on Social Work*,

Education and Social Development)から、首尾一貫感覚(自分の生きている世界は筋道が通っているという感覚であり、1) 自分の置かれる状況がある程度予測または理解できるであろうという「把握可能感」、2) 何とかやっつけられるという「処理可能感」、3) 日々の営みにやりがいや生きる意味を感じられるという「有意味感」の3因子構造を持つ)の妥当性が示唆された。

横断調査としては、2012年に立ち上げた当事者研究ネットワークによる調査により、ASDにおいては反芻傾向が高く、把握可能感が低い傾向があるとともに、反芻傾向と把握可能感との間に強い負の相関関係($spearman = -.712, p < .001$)が認められた。ASDに対して当事者研究によって把握可能感を高めることが、当事者のwell-beingを大きく損なう反芻傾向に対して治療的な効果を及ぼす可能性が示唆された。また、誰と当事者研究を行っているかが、処理可能感、有意味感と関連している傾向が認められ、「一人で」<「支援者・医療者と」<「同じような困りごとを抱えた当事者と」<「家族と」の順に効果が高くなる傾向が認められた(熊谷, 2016, 日本整形外科学会誌)。

縦断調査としては、2010年から2014年の5年間にわたり浦河べてるの家に通う統合失調症の主診断を持つ外来患者を対象に質問紙調査および半構造化面接を用いた症状評価を行った分析の結果、当事者研究群($n = 16$)の自己効力感尺度の合計点は、2010年時よりも2014年時の方が有意に高くなっていた。さらに2011年時と2014年時の自己効力感は、当事者研究群の方が、当事者研究に参加していなかった群($n = 19$)よりも有意に高かった(石川, 2016, 認知療法学研究)。

介入研究としては、綾屋研究員のファシリテーションのもと、2012年以降、月に2回、1回1時間の発達障害者を対象とした当事者研究会を継続し、エスノメソドロジー・会話分析によって「言いつばなし聞きつばなし」という順番交代のルールが、ASD者にとって語りやすい環境を提供している可能性を見出した(浦野ほか, 2015, ナラティヴとケア)。加えて実践の中で、ASD者の当事者研究を進めていくうえでは、定型発達者の特性や定型社会の暗黙のルールに関する知識が必要という認識にいたり、当事者から「定型発達者、定型社会のここがわからない」という意見を抽出し、様々な専門領域からの回答を講義形式でレクチャー、意見交換をする「ソーシャル・マジョリティ研究会」を立ち上げた(綾屋, 2015, 情報処理)。以上のような試行錯誤的な実践と分析を踏まえ、2015年6月から2016年8月にかけて、月に1回程度、当事者研究の経験が豊富な3つのグループ(統合失調症を中心とした「べてるの家」、トラウマや薬物依存症を中心とした「ダルク」、発達障害を中心とした「おとえもじて」)で定期的に研究会を開き、ASD者向けの当事者研究マニユ

アルと、これを用いた臨床介入研究のプロトコルを作成し、2016年9月に東京大学ライフサイエンス委員会臨床審査委員会の承認を得た(No. 16-100)。予備研究では、対処可能感の有意な上昇($p = .043$)が認められた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計21件)

*Fukuyama, H., Kumagaya, S., Asada, K., Ayaya, S., & Kato, M. (2017). Autonomic versus perceptual accounts for tactile hypersensitivity in autism spectrum disorder. *Scientific Reports*, 7(1):8259.

*Inui, T., Kumagaya, S., & Myowa-Yamakoshi, M. (2017). Neurodevelopmental hypothesis about the etiology of autism spectrum disorders. *Frontiers in Human Neuroscience*, 11: 354.

*Aramaki, E., Shikata, S., Ayaya, S., & Kumagaya, S. (2017) Crowdsourced identification of possible allergy associated factors: automated hypothesis generation and validation using a crowdsourcing services, *JMIR Research Protocols* (in press).

*浦野茂 (2016) 当事者研究の社会的秩序について, *保健医療社会学論集*, 27(1):18-27, Jul.

*石川亮太郎, 小林茂, 石垣琢磨, 向谷地生良 (2016) 当事者研究による心理社会的認知の変化: 浦河べてるの家における5年間の縦断調査, *認知療法学研究*, 9(1):55-65, 9, Feb.

*Asada, K., Tojo, Y., Osanai, H., Saito, A., Hasegawa, T., & Kumagaya, S. (2016) Reduced personal space in individuals with autism spectrum disorder. *PLoS ONE*, 11(1):e0146306.

*Lin, I-F., Mochida, T., Asada, K., Ayaya, S., Kumagaya S., & Kato, M. (2015) Atypical delayed auditory feedback effect and Lombard effect on speech production in high-functioning adults with autism spectrum disorder, *Frontiers in Human Neuroscience*, 9:510.

*Aramaki, E., Shikata, S., Miyabe, M., Usuda, Y., Asada, K., Ayaya, S., & Kumagaya, S. (2015) Understanding the relationship between social cognition and word difficulty. A language based analysis of individuals with autism spectrum disorder, *Methods of information in medicine*, 54(6):522-529.

*Sumitani, M., Misaki, M., Kumagaya, S., Ogata, T., Yamada, Y., & Miyachi, S. (2014) Dissociation in accessing space and number representation in pathologic pain

patients, *Brain and Cognition*, 90:151-156.

*熊谷晋一郎, 綾屋紗月, 武長龍樹, 大沼直紀, 中邑賢龍 (2013) 一般大学生における聴覚過敏の実態とリスク要因, *Audiology Japan*, 56(3):234-242.

Kato, M., Asada, K., Kumagaya, S., & Ayaya, S. (2015) Inefficient facial scan paths in autism?, *Journal of Eye Movement Research*, 8(4):227.

*熊谷晋一郎 (2016) 感覚過敏・身体症状の困難の理解と支援: 偏った感覚の困難さを聞くことが支援につながる, *実践障害児教育*, 44(3):12-14, Oct.

*綾屋紗月 (2016) 当事者研究の展開: 自閉スペクトラム症当事者の立場から, *現代思想*, 44(17):160-173, Sep.

*熊谷晋一郎 (2016) 痛みの哲学, *日本整形外科学会誌*, 90(7):501-511, Jul.

*浅田晃佑, 熊谷晋一郎 (2015) 発達障害と共感性: 自閉スペクトラム症を中心とした研究動向, *心理学評論*, 58(3):379-388, Feb, 2016.

*綾屋紗月 (2015) 発達障害当事者研究: 当事者研究とソーシャル・マジョリティ研究の循環, *情報処理*, 56(6):555-557, Jun.

*熊谷晋一郎 (2014) 自閉スペクトラム症と痛み, *Practice of Pain Management*, 5(4):232-235, Dec.

*Kumagaya, S. (2014) Tojisha-kenkyu of autism spectrum disorders. *Advanced Robotics*, 29(1):25-34.

*石原孝二 (2013) 精神病理学から当事者研究へ: 現象学的実践としての当事者研究と<現象学的共同体>, 石原孝二・稲原美苗編, 『共生のための障害の哲学』UTCP Uehiro Booklet, 2:115-137, Oct.

[学会発表](計20件)

*Ishihara, K. (2016/12/16-18) Toward a phenomenology of disability, *PEACE VII Conference: Phenomenology of Dis/Ability*, Komaba I Campus, The University of Tokyo, Dec.

*Iijima, K., Yomogida, Y., Asada, K., Abe, K., Sugiura, A., Kumagaya, S., & Matsumoto, K. (2016) Excessive association between negative intentionality and immorality is diminished in autism spectrum disorder, *Neuroscience 2016*, San Diego, USA, Nov.

*Urano, S., Mizukawa Y., & Nakamura, K. (2016) Creating 'idiom of distress' collaboratively: An analysis of practices of self-directed research by people with mental illness, *3rd ISA Forum of Sociology*, Wien, Austria, Jul.

*Urano, S., Nakamura, K., & Mizukawa, Y. (2016) Accomplishing understanding via analogy: An analysis of practices of self-directed research by people with

mental disabilities, *Atypical Interaction Conference*, Odense, Denmark, Jul.

*Fukuyama, H., & Kato, M. (2016) Spontaneous turn-taking drumming in an infant-parent interaction: a pilot study, *International Conference on Infant Studies*, New Orleans, USA, May.

*Kamide, H., Asada, K., Ayaya, S., & Kumagaya, S. (2015) Narratives and traits on well-being for normal and autistic people, *The 16th Annual Convention of Society for Personality and Social Psychology*, California, USA, Feb.

*山根耕平, 向谷地生良, 熊谷晋一郎, 石原孝二, 向谷地悦子, 池松麻穂, 泉望, 木村純一, 山口絢可, 伊藤知之, 小林茂, 渡辺さや可, 吉田めぐみ (2014/11/1) 当事者研究の「研究テーマ」と「研究のまとめ方」の実態調査からみる当事者研究の傾向と意義, *日本精神障害者リハビリテーション学会第22回いわて大会*, いわて県情報交流センターアリーナ, 岩手県, Nov.

*上出寛子, 浅田晃佑, 綾屋紗月, 熊谷晋一郎 (2014) 自伝的物語における解釈発展性と視点多様性の定量化手法, *日本心理学会第78回大会*, 3AM-1-095, 京都, Sep.

*Sato, S., Mukaiyachi, I., Okuda, K., & Yokoyama, T. (2014). How can Tojishya Kenkyu (self-directed research) deepen one's self-understanding?: Effectiveness of Tojishya Kenkyu for better understanding of self, *Joint World Conference on Social Work, Education and Social Development*, Melbourne Convention and Exhibition Centre, Australia, Jul.

*Ayaya, S., Urano, S., & Kumagaya, S. (2014/7/13-19) How diagnostic categories influence the self-description of person with a diagnosis: On the relation between diagnosis of autism spectrum disorder and self-identity (1). *XVIII ISA World Congress of Sociology*, Pacifico Yokohama, Kanagawa, Jul.

*Urano, S., Ayaya, S., & Kumagaya, S. (2014/7/13-19) An ethnomethodological explication of the usage of diagnostic categories: On the relation between diagnosis of autism spectrum disorder and self-identity (2). *XVIII ISA World Congress of Sociology*, Pacifico Yokohama, Kanagawa, Jul.

*Asada, K., Itakura, S., Okanda, M., Moriguchi, Y., Yokawa, K., Konishi, K., Kumagaya, S., & Konishi, Y. (2014) Development of pragmatic language understanding in children with autism spectrum disorder, *International Meeting for Autism Research*, Atlanta, USA, May.

*綾屋紗月, 浦野茂, あおの, ことこ, トウコ, みつる, ミナリ, 熊谷晋一郎

(2013/5/19) 発達障害当事者研究とエスノメソドロジー：「社会性の障害」を再考する，第 39 回日本保健医療社会学会大会，東洋大学朝霞キャンパス講義棟 306 教室，埼玉，May.

〔図書〕(計 19 件)

綾屋紗月 (2016) 当事者として、思うこと，金生由紀子・渡辺慶一郎・土橋圭子(編)，新版：自閉スペクトラム症の医療・療育・教育，287-297，金芳堂，Dec. (謝辞有)

石原孝二 (2016) 総論：精神医学と当事者，石原孝二・河野哲也・向谷地生良(編)，精神医学と当事者，3-30，東京大学出版会，Nov.

熊谷晋一郎，五十公野理恵子，秋元恵一郎，上岡陽江 (2016) 痛みと孤立：薬物依存症と慢性疼痛の当事者研究，石原孝二・河野哲也・向谷地生良(編)，シリーズ精神医学の哲学 3 「精神医学と当事者」，225-251，東京：東京大学出版会，Nov. (謝辞有)

綾屋紗月(2016) 発達障害者の当事者研究，石原孝二・河野哲也・向谷地生良(編)，シリーズ精神医学の哲学 3 「精神医学と当事者」，206-224，東京：東京大学出版会，Nov. (謝辞有)

*浦野茂 (2016) 神経多様性の戦術，概念分析の社会学，第 1 章，7-26，ナカニシヤ出版，Apr. (謝辞無)

熊谷晋一郎 (2015) 関係としての身体：障害を生きる経験から，大澤真幸・中島秀人・諸富徹・杉田敦・佐藤卓己(編)，シリーズ「岩波講座 現代」第 7 巻身体と親密圏の変容，75-106，東京：岩波書店，Dec. (謝辞無)

熊谷晋一郎 (2015) 発達障害当事者の困り事としての睡眠問題，子どもの睡眠と発達医療センター(編)，今，小児科医に必要な実践臨床小児睡眠医学，96-102，東京：診断と治療社，Nov. (謝辞無)

*浦野茂・綾屋紗月・青野楓・喜多ことこ・早乙女ミナリ・陽月トウコ・水谷みつる・熊谷晋一郎 (2015) 言いつばなし聞きつばなし，ナラティブとケア，6:92-101，Jan. (謝辞有)

Ishihara, K. (2014) Learning from tojisha kenkyu: Mental health “patients” studying their difficulties with their peers, In T. Shakespeare (Ed.), *Disability Research Today: International Perspectives*, 27-42, London: Routledge.

熊谷晋一郎 (2014) 自閉スペクトラム症を「身体障害」の視点からとらえる，市川宏伸(編)，ハンディ Book シリーズ発達障害支援・特別支援教育ナビ第 2 巻「発達障害の『本当の理解』とは」，38-46，東京：金子書房，Nov.

熊谷晋一郎 (2014) 当事者研究に関する理論構築と自閉症スペクトラム障害研究への適用，東京大学博士論文(乙第 17965 号)，Jul.

綾屋紗月 (2014) 診断基準が抱える課題と当事者研究の役割，市川宏伸(編)，ハンディ

Book シリーズ発達障害支援・特別支援教育ナビ第 2 巻「発達障害の『本当の理解』とは」，73-78，東京：金子書房，Nov. (謝辞有)

浅田晃佑 (2014) 子どもの社会性の発達と障害—自閉症スペクトラム障害とウィリアムス症候群—，板倉昭二(編著)，発達科学の最前線，169-187，京都：ミネルヴァ書房，Apr.

熊谷晋一郎 (2013) 依存先の分散としての自立，村田純一(編)，シリーズ「知の生態学的転回：人文科学のフロンティア」第 2 巻技術：身体を取り囲む人工環境，109-136，東京：東京大学出版会，Jul.

綾屋紗月 (2013) アフォーダンスの配置によって支えられる自己—ある自閉症スペクトラム当事者の視点より 河野哲也(編)，シリーズ「知の生態学的転回：人文科学のフロンティア」第 3 巻倫理：人類のアフォーダンス，155-180，東京：東京大学出版会，Aug. (謝辞あり)

熊谷晋一郎 (2013) 痛みからはじめる当事者研究，石原孝二(編)，当事者研究の研究，217-270，東京：医学書院，Jan.

綾屋紗月 (2013) 当事者研究と自己感，石原孝二(編)，当事者研究の研究，177-216，東京：医学書院，Jan. (謝辞あり)

Necco 当事者研究会 (2013) 発達障害者による当事者研究会，石原孝二(編)，当事者研究の研究，271-291，東京：医学書院，Jan.

Necco 当事者研究会 (2013) 当事者研究をやってみた，石原孝二(編)，当事者研究の研究，292-301，東京：医学書院，Jan.

〔その他〕

ホームページ等

<http://toukennet.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

熊谷 晋一郎 (KUMAGAYA, Shinichiro)
東京大学・先端科学技術研究センター・准教授
研究者番号：00574659

(2) 研究分担者

向谷地 生良 (MUKAIYACHI, Ikuyoshi)
北海道医療大学・看護福祉学部・教授
研究者番号：00364266

加藤 正晴 (KATO, Masaharu)
同志社大学・赤ちゃん学研究センター・准教授
研究者番号：20408470

石原 孝二 (ISHIHARA, Koji)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：30291991